

研究ノート

在日コリアン1世女性のライフ・ヒストリー

—— 全永女（1932年生）の手記を中心に ——

石川 亮太*

要旨

全永女は1932年、日本の植民地支配下にあった済州島に生まれた。1935年に渡日、大阪市東部のコリアン集住地域である猪飼野に住むことになった。1945年に御幸森国民学校初等科を卒業した後、日本の敗戦を迎えた。その年のうちに母親は済州島に帰還したが、全永女は父親とともに大阪に残り、1946年4月に民族学校の建国高等女学校（現在の学校法人白頭学院建国幼・小・中・高等学校）に第一期生として入学した。卒業後は大阪女子大学を経て建国学校の教員となった。今日では渡日1世のライフ・ヒストリーを記録すること自体がきわめて難しい状況となっているのに加え、全永女の場合、不就学が常態化していた当時のコリアン女性の中で異例ともいえる高学歴を経験したことが注目される。その経験を本人がどのように振り返っているかを記録することには、大きな意義があると考えたことから、本稿では全永女が自身の半生を振り返った手記を紹介したうえで、関連文献やインタビューをもとに、その成立過程や時代背景について解説を加えた。

キーワード

在日コリアン 白頭学院建国学校 李慶泰 女性教育

目 次

1. はじめに
2. 手記本文
3. 手記の成立過程
4. 解説——在阪コリアンの歴史と関連づけて
5. 補論——記憶の継承
6. 参考資料

1. はじめに

本稿は在日コリアン 1 世の全永女が半生を振り返った手記を紹介し、関連文献やインタビューをもとに、その成立過程や背景について解説したものである。

全永女 (전영녀, チョン・ヨンニョ) は 1932 年、日本の植民地支配下にあった済州島に生まれた。1935 年に渡日、大阪市東部のコリアン集住地域である猪飼野に住むことになった。1945 年に御幸森国民学校初等科を卒業した後、日本の敗戦を迎えた。その年のうちに母親は済州島に帰還したが、全永女は父親とともに大阪に残り、1946 年 4 月に民族学校の建国高等女学校 (現在の学校法人白頭学院建国幼・小・中・高等学校。以下総称を建国学校とする) に第一期生として入学した。卒業後は府立大阪女子大学を経て建国学校の教員となり、退職後は生野区の自宅で学習塾を運営したほか、建国学校にも非常勤講師として断続的に出講を続けた¹⁾。

ここで紹介する手記は、全永女の生い立ちから学生時代までを中心に、印象に残ったエピソードなどをおおむね時系列に沿って叙述したものである²⁾。全永女は 2017 年から 2018 年にかけて、ケイビーエス株式会社 (大阪市生野区、印刷業) で行われた「文章教室」において、自分史作成の課題としてこの手記を執筆した。

今日では渡日 1 世のライフ・ヒストリーを記録すること自体がきわめて難しい状況となっているのに加え、全永女の場合、不就学が常態化していた当時のコリアン女性の中で異例ともいえる高学歴を経験したことが注目される。その経験を本人がどのように振り返っているかを記録することには、大きな意義があると考えられる。

当初は全永女へのインタビューを重ね、手記が言及していない点を含めたライフ・ヒストリーの復元を目指していたが、コロナ禍による会合の制約や本人の健康状態などを勘案して、手記の紹介を核とする形に方針を変更した。しかし整理の過程で、全永女とご家族の厚意により、自宅 (大阪市生野区) に保管されていた関連の資料や写真等を閲覧することができた。またご家族や金美優 (建国高校 14 期卒) の斡旋により、ご親族や白頭学院の関係者へのインタビューも実施した。各位のお力添えに心から感謝申し上げたい。

以下では第 2 節で手記本文を翻刻し、第 3 節で手記の成立過程について検討する。第 4 節では手記の内容に沿って、手記に述べられなかった事実や時代背景等を解説する。第 5 節は補論として全永女のご家族の記憶について触れる。第 6 節には手記本文と関係する参考資料を採録する。人名の敬称は本人を含め原則として省略した。筆者 (石川) の記述部分では、朝鮮半島にルーツを持つ人びとの呼称をコリアンとしたが、法令や慣行によって定着している用語はそれに従った。

2. 手記本文³⁾

(1) 幼い頃のこと

私は幼少の頃、君が代丸（舟）で日本に来た⁴⁾。

年令は四才と聞いていたが、その頃は数え年で言っていたので、おそらく三才だろうと思う。とにかく生まれ故郷の済州道の思い出はほとんどない。

又、日本では日本語がわからないので母の仕事場へついて行って一人で遊んでいた。

そうこうしているうちに学令期の六才になり学校へ行く事になった。

入学式の日、母親と校門をくぐった。その時、母親が急に慌て出した。私の名前を日本語読みに出来ない。母も日本語がたどたどしいので、やっとの思いで教えてくれそうな人を探し求め教えてもらうことができた。

式が始まり生徒の名前を呼び始めた。「〇〇エイコさん」と言う名前が呼ばれた。待っていたとばかりハイと答えた。その時、私の他にもう一人ハイと答える人がいた。すると先生が私に「あなたはゼンエイジョですよ」と教えてくださった。

初めて私の名前の日本語読みを知るようになった。

(2) 小学校

〔入学〕

私は一九三九年に第四尋常小学校に入学した⁵⁾。

入学式も終わり、第一日目の最初の先生のお話は『あの子きれい！』と声に出さずに心で思っただけでもわかる人がいる。それは天皇陛下です。天皇陛下は人の姿になってこの世にあらわれた神様です。天皇陛下が通ることを行幸と言って行幸の時は丁寧に頭を下げて通りすぎるまでは頭を上げてはいけません。」と教えて下さった。

授業ではある時、私は宿題を忘れた。「宿題は家でしてくるものです。」と言って家へ帰され、家でして慌てて学校へもどった。それ以来宿題を忘れないように注意をはらったものだ。

又、ノートの使い方にも気をつけて下さった。ノートが使い終わって新しいノートに使いかえる時、先生の検印をもらわなければならなかった。厳しい先生だったが色々しつけて頂いて感謝している。

又、内鮮一体⁶⁾で韓国・朝鮮と日本とは一つだと教えられ、私達韓国朝鮮の生徒達に対する差別はなかった⁷⁾。

家の近くの学校の韓国のお友達の話では、成績などで差別があったとなげいていた。

一九四一年十二月八日に太平洋戦争が始まった。私が三年生の時で学校の名称も御幸森国民学

校に改称された⁸⁾。

それからは学校へ登校すると奉安殿の方へ向かって最敬礼をして各自の教室へ行くことになっていた。

奉安殿というのは天皇と皇后の写真と教育勅語⁹⁾が入っているとの事だった。

最敬礼は腰を九十度に折って丁寧におじぎをする様に練習させられた。

又、毎週月曜日の朝礼の代わりに御幸森神社へ武運長久をお祈りするためにお参りした。軍歌も良く歌った。その中の勢いの良い一つ。

東亜侵略百年の野望をここにくつがえす今決戦の時来たる¹⁰⁾。

〔教育勅語〕

教育勅語は式典の時、正装された校長先生が白い手袋をはめられ細長い木箱からもったいなさそうに巻き物を取り出し、それをゆっくり広げて「朕思うに…」とおもむろに読んでいらっしやった。

この教育勅語は私達皆おぼえさせられた。又、一枚の半紙に全文を墨汁で書いて上手な物は貼り出されたりもした。

そんなある日、奉安殿の前に十人位の男生徒がずらりっと立たされていた。今までそんなことはなかった。皆でどうして立たされているのかわからなくてお互いに聞きあっていたが、なかなか伝わらない。やっとわかった。それも普通の声ではなく小さな声でこそそと話してくれた。実は教育勅語は「朕思うに我が…」と始まって最後に「御名御璽（ぎよめいぎよじ）」で終わるのだが、立たされた生徒たちは、どこで仕入れたのか自分達でつくったのか教育勅語を「朕思わずへをこいて汝臣民くさかろう。鼻をつまんでぎよめいぎよじ」と言っていたそう。そこでもったいなくも神様のありがたいお言葉をそのように変えてとんでもないと説教され、奉安殿の前に立たされたそう。皆おかしくて笑いたくて。でもがまんしなければ同じ目にあうだろうとこらえるのに苦労した。

〔父母の思い出〕

又、内鮮一体（日本と朝鮮は一つ）の教育で私も日本人（皇國臣民）¹¹⁾だと思っていた。それなのに両親は日本語が話せない。

運動会の時だった。二人の姉は生計維持のため学校には行けなかったので母にとっては私の運動会が初めてだった。やっと都合をつけて運動会なるものを見に来たのだった。気分もうきうきだったのだろう。そこへ私がお友だち何人かと母の前を通ることになった。すると大きな声で「永女（ヨンニョ）や！」と韓国語読みで呼んだ。私は顔をしかめていやな顔で母の方は見なかった。それ以来運動会は勿論のこと、学校へは来なかった。

それに母はいつも저고리（チョゴリ）しか着ない。저고리를着ていて交番所前で警官に저고리의ひもをひきちぎられている人がいたとのうわさがあったので저고리를着ないと頼んだが、着なれているせいか、それしか着ない。

父は創氏改名の時、姓は大原とかえるが下の名前の永女は変えようとしな。私が日本流の名前、永子か永江にしてほしいと頼んだ。すると名前は一つじゃ！と怒って聞き入れてくれなかった。

そうこうしているうちに改名届を出していない者は私一人となっていた。

戦争はだんだん激しくなってきた。生徒達は集団疎開や縁故疎開等に行く事になり学校も改名どころではなかった。私は名前を変えることなく本名のままだった。

戦時中（小学校の時）内鮮一体の教育で私は日本人（皇國臣民）だと思ひ日本語を話せない父母をうとましく思った。

〔凱旋〕¹²⁾

一年生から四年生まで担任をして下さった松井先生は四年生が終わると退職された。

さびしかった。

戦争はだんだん激しくなってきた。

空襲警報が発令された時の灯火管制には神経がすりへった。一生けんめい明かりがもれないようにするのだが、うまく出来ず何度も注意されたりしたものだ。

学校では「戦争は負けそうになっても神風が吹いて戦争には勝ちます。」と話してくれた。又、戦死して遺骨が帰って来る時、凱旋凱旋と言いながら先生と皆で迎えに行った。

その時、凱旋と言うのは戦死して遺骨が帰って来る事を言うのだと思った。それが成長して、ふとした事から辞書をひいた。すると凱旋とは戦に勝ち（かちどきをあげて）帰ることとなっていた。びっくりした。

〔卒業〕

五年生（一九四三年）になってからは学童疎開の話があつたりして本格的な授業は少なかったように思う。

いよいよ一九四四年九月頃、奈良地区への集団疎開組と縁故疎開組に分かれ縁故疎開組の何人かは縁故先の都合で待たされ、学校へ通って自学自習をしていた。時々先生がのぞいて下さった。私もこの自学自習組に入っていた。

一九四五年二月に疎開寮火災で学童二名が焼死した事が報じられた。疎開先は安全だと思っていたのに何となく心細くなってきた。

そうこうしているうちに、卒業式が近づいてきたので三月には疎開先から皆帰り登校してきた。

先ず卒業式に歌う歌を練習しなければならなかった。それまでは「ほたるの光」だったがこの歌は鬼畜米英の歌だと言うことで新しい歌を歌わなければならなかった。その歌は

ばんざい ばんざい ばんざい

山辺も野辺も かすみわたり

鳥うたう……

歌いやすい楽しい歌だったので皆早くおぼえられた。

いよいよ一九四五年三月十四日卒業式だった。その日校長先生は前日の深夜に罹災され卒業式だと言うのによれよれのほこりっぽいみすぼらしい服装をしていらっしやった。

(3) 大阪空襲

一九四五年六月一五日大阪に大空襲があった。私の家は平野川ぞいにあったので焼夷弾が落ちるごとにシュッシュッと音がする。その音を聞きながら音と反対方向に走るのだが全身から血の気がひき、なかなか走りづらかった。もう駄目だと思いながら走っているうちに防空壕が見えた。入れて下さい、とお願いした。しかし人がいっぱいに入れなかった。それからは足をひきずりながら、ただひたすら走った。すると雑草が高く生えている草むらがあった。そこへかくれ込んだ。

やがて空襲が解除された。

家に帰ってみると家は焼けていなかった。

ほっとして川をへだてた向いを見ると向い側の家々ももえていた。その西側にある私が通っていた御幸森国民学校がめらめらと燃えさかっているじゃないですか。

それを見ながらなんとも言いようのない気持ちになった。

(4) 飢餓

戦争中のつらかったことの一つは食べ物が足りなくていつもひもじい思いをしたことだ。

お菓子屋さんにはりんごの皮を乾かしたものだけしか売っていなくなり、それもなくなって店がつぶれた。

また学校ではわらくず入りのパンが配られたことがあった。これはとても食べづらかった。それからほとんど米粒のないとろみのあるおじやを売っている店の前に列が出来ていた。急いで私も加わった。ところが私の何人か前で売り切れた。泣きなくなった。

この様な事は一度や二度ではない。

その時「ほしがりません勝つまでは」の標語を思い出して「それは無理です。」と小さくつぶやいたものだ。

(5) 母との別れ

私は終戦の年（一九四五年）に小学校を卒業した。当時は中学校は義務教育ではなかったので私は働くことになり子供の靴作りの仕事についた。仕事はきらいではなかったが中学校へ通っているお友達がうらやましくて働きながら夜間中学校へでも行きたいと思うようになっていた。

その様な時、母が帰国を決意していた。

さあ大変帰れば学校には行けなくなる。そこで結婚して日本に残ることになっている姉の所へでもと考えた。

そうこうしているうちに船で帰国する日になった。母が先に乗船し、私は見送りの客と話をしていた。出航の時間になった。母が早く早くと大声で呼んでいた。その時私は首を横に振った。船は出航し岸を離れた。

母とはこの様な別れ方をしてしまった。

それから約一年後、母は又密航で私を連れに来たが言葉等ままならず、つかまってしまい韓国にもどされた。

又、私が二十才位の時、母は密航で私を連れに来たがやはりつかまってしまった。その時は福岡刑務所で刑に服し裁判所で裁判があった。

裁判当日、母が罪人として手錠をはめて出て来たその姿を見た時、涙を見せまいとがんばったが、ままならなかった。母もつらかっただろうと思う。

それからしばらくして大村収容所¹³⁾に移ったとの連絡があり面会に行った。

母への不孝の申し訳ない涙がこらえ切れなかった。まもなく母は韓国へ帰された。

それから約十年後、母が病気で危篤との連絡があり、母のもとへ急いだ。

母の最期は息切れ切れに

「来てくれてありがとう」と言って静かに息たえた。

「お母さんごめんね！ありがとう。」

(6) 学校生活

母は帰国し、私は仕事をしていた時（一九四五年）民族学校・白頭学院の生徒募集があった¹⁴⁾。

生野界限は直接学校関係者が歩きながら希望者を募っていた。

私は又誰にも相談せず応募した。

学校は一九四六年四月一日に開校し入学する事が出来た。

しかし私の場合、家族の事情で学業を続けられる状態ではなかった。それを学校が知る事になり、授業と授業の間の休憩時間に給品部で文房具売りをし、昼休みにはパンや牛乳を売るなどして、学業を続けられるようにしてくれた。

しかし大学進学は諦めていた。ところが進学適性検査¹⁵⁾(今の大学センター試験のようなもの)の願書提出締め切り一日前に校長の李慶泰先生が「願書は？」と声をかけてこられた。私は黙って首を横に振った。すると李先生は学籍簿に貼ってあった中学校入学時の写真をはがし(当時は即日写真がなかった)それにお金を添えて願書を出してくださったのである。この時の感謝の気持ちは言葉で言い表すことは出来ない。

大学受験の日に着ていく服を気にされて李先生の사모님¹⁶⁾が服を縫って下さった。

受験の日、入試問題にミスがあった。それを指摘する事が出来た。その事を先生にお話すると大喜びされ、自らプリン等おいしい物を作って下さった。本当においしかったしうれしかった。

大学三回生の時、裕福な家庭の生徒の住み込み家庭教師のアルバイトを先生が紹介して下さいました。おかげで四回生の大切な時期、学校の事だけに専念する事が出来、助かった。

学校卒業後、教師として勤務し五、六年後肺結核にかかった。当時はまだ大変な病気だったので阿武山日赤病院に入院することになり先生には色々御心配をおかけしてしまいました。

私が今日あるのは、李慶泰先生のおかげだと常々感謝している。

(7) 奨学金

私は大学に入学し奨学金を申し込もうとした。ところが国籍が日本国でなければ受ける事が出来ないという事だった。がっかりした。ところがそれから数日後、事務所から呼び出しがあった。すると財団法人報国積善会の濱田文二郎さんと言う方が待っていて下さった¹⁷⁾。部屋でさっそくお話に入った。もの静かなおやさしそうな方だった。

最初に奨学金を受けられなくてお気の毒ですね。とおっしゃって日本国籍を取りなさい。二重国籍になってもわかりませんから大丈夫です。と強くすすめて下さった。でも私はそうする事は法にふれる事だから首をたてにはふれなかった。すると心配そうにわずかではありますが返済なしで使ってください。積善会から出しますからとおっしゃった。それからは定期的に送って下さった。本当に感謝した。

私が学校を卒業して仕事につき五、六年後、肺結核で阿武山日赤病院¹⁸⁾に入院することになった。その時、おいしいお菓子里、おやさしいお手紙を添えて送って下さった。

どんなに感謝したことか。

3. 手記の成立過程

この手記は先述したように、2018年にケイビーエス(株)で行われた文章教室の課題として執筆された。しかしその内容は、この時に初めて整理されたものではないように思われる。全永

女が保管する資料のなかに、2002年8月6日に大阪市立大領中学校で実施した「反戦平和学習」の講演資料と思われるものが含まれている（第6節(1)に収録）。そこにある「お話のポイント」は、今回紹介した手記のうち、国民学校初等科時代までの記述と、おおむね重なっている。ここから考えれば、手記の少なくとも前半部分のプロットは、2002年の講演時まで整理されていたと考えられる。

同じ資料の「全永女さんの伝えたいこと」では、「自分を大切にし、自分の頭でしっかり考えられる人間になってほしい」ということを強調している。「お話のポイント」とあわせて読めば、このようなメッセージの裏側には、皇民化教育の下で日本人であることを疑わないで育ち、コリアンとしての習慣を守る父母を疎ましく思っていた自分への悔恨があったことが読み取れる。日本の敗戦後、母親の意向に背いて「むりやり日本に残った」ことが、そうした悔恨の一部をなしていたことも注目される。この講演を行った頃の全永女にとって、かつて向学心にあふれる少女であったことは必ずしも肯定できる過去ではなく、痛みをもって振り返らざるを得ない記憶であった。この点は手記を読み解く際のポイントの一つになるだろう。

手記の後半部は1946年に建国学校に入学した後、大学を卒業し、教師として建国学校に戻るまでの時期を扱う。ただし手記の前半部とは異なり、必ずしも時系列を追っているわけではなく、叙述も断片的である。自分史を振り返るというよりも、自分の人生に手を差し伸べてくれた李慶泰と濱田文次郎への感謝を表現したものというのが適切だと思われる。

とくに李慶泰が全永女の人生に与えた影響は決定的なものであった。1947年に闘病中の父親が死去した後、全永女はしばらくアルバイト等で生計をたてていたようだが、高校2年の時、李慶泰に招かれ、その自宅に住むことになった。それは全永女が大学に進学した後、住み込みの家庭教師の職を得るまで続いた（第6節(2)）。李慶泰の長女李智恵によれば、李慶泰は家族の生活にも余裕がないなかで全永女を家族と同等に扱い、李智恵と全永女のため自宅に屋根裏部屋をしつらえ、二人は同じ布団を分け合って寝たという。全永女は1965年、済州島出身の男性と結婚し、建国学校を退職するが、その後も李慶泰の家族との行き来は続いた。全永女の長女Mさんによれば、幼い頃は毎週のように全永女に連れられて李慶泰の自宅を訪問しており、李慶泰の一家を親戚だと思い込んでいたという¹⁹⁾。

全永女は李慶泰の伝記『分断と対立を超えて』（1999年）に刊行委員として加わり²⁰⁾、『建国：白頭学院創立60周年記念誌』（2006年）によせた「李慶泰初代校長を思う」でも、李慶泰への感謝の念をつづっている。手記後半部のプロットがいつ頃できたかは明らかでないが、上のような活動のなかで李慶泰の思い出を整理していったのだろう。

なお手記執筆後の2019年、全永女は「李慶泰先生に捧げる感謝のことば」という文章を書き、印刷に付している。印刷作業を受注したケイビーエス㈱の林芳子によれば、全永女からは「追悼礼拝のとき捧げたいので10部もあれば十分」と説明されたという。その文章は手記後

半の「学校生活」と一部が重複していることから、手記をもとに訂正を加えたものと思われる。この「感謝のこぼ」には手記には見られないエピソードがあり、他では閲覧できないものと思われるので、第 6 節 (2) に収録した。

4. 解説——在阪コリアンの歴史と関連づけて

3 で述べたように、全永女の手記は必ずしも自身のライフ・ヒストリーの全体像を描こうとしたものではない。以下では手記の構成に準じて、手記に書かれていない事実や時代背景について補っておく。

(1) 幼い頃のこと

全永女が済州島から大阪に来たのは 1935 年 8 月である (第 6 節 (1) 略歴)。父親はすでに大阪に居住しており、全永女は母親および姉 2 人とともに渡航した²¹⁾。母子が乗船したという君が代丸は、1923 年から尼崎汽船が済州島・大阪間で運航していた定期船である。この時期の済州島では大阪への出稼ぎ熱が高まっており、これに応じる形で尼崎汽船をはじめ複数の会社が定期航路の運営を開始した。激しい競争の結果、1935 年以後は尼崎汽船の単独運航となり、第二次大戦末期まで大阪・済州間を結んだ²²⁾。

当時の日本政府はコリアンの日本渡航を制限する方針を採っており、1928 年 7 月から渡航証明制度を実施した。渡航を希望するコリアンは、居住地を管轄する警察署で許可を得る必要があったが、日本に家族がいる場合には許可を得ることが比較的容易であった。そこで先に渡航していた夫を頼って妻子が渡航する例が増え、在日コリアン社会の構成が単身者中心から家族居住へと変化する契機となった²³⁾。全永女の場合もこれにあてはまる。

コリアンの大阪への移動が本格化したのは 1910 年の植民地化後である。

1915 年に 400 人に過ぎなかった大阪府在住のコリアンは、1922 年に 1 万人を、32 年には 10 万人を、35 年には 20 万人を、41 年に 40 万人を超えた。男女比で見ると、女性が 20% を超



図 1) 幼少時代 (撮影時期不明)
※以下の写真は図 9 を除きすべて全永女所蔵



図 2) 済州島の故郷訪問 (1960 年代, 右上本人)

えたのが1926年、40%を超えたのが1935年である²⁴⁾。全永女は大阪のコリアンが急激に増え、かつ女性を含む家族居住に移行しつつあった時期に、その一人として大阪に来た。

大阪の在日コリアンの特徴は、済州島出身者がその大きな部分を占めたということである。大阪府下で見て1925年で4割、31年では35%が済州島出身者であった。在阪コリアンの絶対数が増加するなかで、次第に済州島出身者の比率は減るが、それでも1935年の在阪コリアンの2割弱、3万6千人は済州島出身者であった。同じ年の済州島の島内人口は19万8千人である²⁵⁾。済州島と大阪の結びつきがいかに強いものであったかが分かる。

こうしたコリアンの渡航は工業都市大阪の労働需要に支えられていた。大阪市総人口に占めるコリアンの比率は1928年に約2%であったのが、1942年には10%を超えた。職業構成としては、男性の場合、1920年後半から市内周辺部の中小零細工場に下層職工として就業する場合が増えた。具体的には金属工やガラス工、ゴム工など炎熱にさらされる過酷な業種に多く従事した。女性の場合は紡績工が圧倒的であった²⁶⁾。

大阪市内ではゴムや機械などの町工場が集中する東成区に多くのコリアンが住んでいた。1941年当時で東成区に住むコリアンは92,444人と記録されており、これは大阪市のコリアンの30.2%、同時に同区住民の24.5%に上る数字である²⁷⁾。当時の東成区は現在の城東区・生野区を含む広大な地域であった（1943年に分離）。

全永女も当時、「運河」と呼ばれた新平野川の側に住んでいた²⁸⁾。1973年まで猪飼野と呼ばれたこの地域は、もともと水はけの悪い低湿地であり、新平野川はその排水を目的に1919年から開削された。この工事のため朝鮮から渡航した労働者が、猪飼野のコリアン集住地域の起源だという言い伝えもある。実際にはそうした労働者の多くは、工事が終わった後、他の工事現場に移動してしまったと思われる。だが排水工事の完成を受け、1923年までに宅地として造成された猪飼野が、その後、日本最大のコリアンの集住地域となったことは間違いない。猪飼野の宅地化をきっかけとして、東成区一帯で安価な住居が多数供給されるようになったことも、この地域にコリアンが集まる原因となった²⁹⁾。

全永女によれば、父親は漢方薬商（韓薬商）を営んでおり、客が自宅まで来て薬を買っていく様子を記憶しているという³⁰⁾。韓薬の調剤には漢文で書かれた本草書を読む必要があり、朝鮮では伝統的に知識人のたしなみとされてきた。全永女の父親の経歴は不明だが、伝統的な学問をある程度修めた人物であったことが推測される。一方で母親も、コリアンの経営する雑貨工場などで働いていたようである³¹⁾。

(2) 小学校時代

全永女が尋常小学校に入学したのは1939年4月である。1937年には既に日中戦争が始まっていた。手記にもあるように1941年4月には尋常小学校が国民学校と改称され、その年の



図 3) 御幸森国民学校時代 (裏面に「昭和十八年五月十七日」とあり)

12 月には太平洋戦争が始まっている。全永女の小学校時代はすっぽりと戦争に覆われており、時局の緊迫化に従って学校生活も刻々と変化したことが手記から窺われる。

手記にあるように全永女の二人の姉は就学の機会を得られなかった。姉たちの出生年は未確認だが、植民地期の朝鮮では 1945 年まで義務教育が施行されず、日本の小学校にあたる普通学校は徐々に整備されたものの高額授業料が必要だった。とくに女性の就学率は低く、公立普通学校の「不」就学率は 1930 年代初まで 90% を超えていた³²⁾。

日本にいるコリアンに対しても、日本政府は積極的な働きかけを行わず、早期の渡航者とくに女性には就学できない者が多かった。しかし家族による長期的な居住が増えてきたことを背景に、日本政府は 1934 年 10 月「朝鮮人移住対策の件」を閣議決定した。これは在日コリアンに対して「指導向上及其の内地融和を図」り、同化政策を推進するものであった。その一環としてコリアンが自主的に運営していた夜学などの取り締まりは厳しくなる一方、公立学校への就学率は上昇したという³³⁾。全永女もこうした状況のなかで入学することになった。

小学校での教育が同化主義的で、在日コリアンの民族的ルーツを尊重するものでなかったことは手記からも明らかだが、これについての全永女の回想には含みを感じられる。手記本文には「内鮮一体で韓国・朝鮮と日本とは一つだと教えられ、私達韓国朝鮮の生徒達に対する差別はなかった」とあり、手書きの草稿ではより直接に「担任の松井先生は内鮮一体の考えで私達朝鮮・韓国人生徒に対する差別はなかった」と述べる(前注 7 参照)。「内鮮一体」というスローガンは、1937 年の日中戦争勃発後、朝鮮総督南次郎が打ち出したとされる。その目的はコリアンの戦争協力を促すことにあったが、文字どおりには、差別の解消をうたうとも解釈できるものであった³⁴⁾。手記からうかがわれるように、個々の教育の現場では、教員によるあから

さまざまな差別を抑制する方向でこのスローガンが機能することもあったのだろう。

だがそうした教育は、コリアンの側が日本人に同化することを求めるもので、日本人の優位を前提としていた以上、コリアンへの蔑視そのものを解消する手立てとはならず、かえってコリアンの子どもの自尊感情を傷付けたり、コリアンであることへの懐疑を植え付ける結果を招いた。全永女は、「内鮮一体」教育によって「皇國臣民」であることを内面化した自分自身が、日本語の分からない父母を差別する側に立ったことを、悔恨の気持ちを込めて振り返っている。前節で述べたように、この部分は手記の核心の一つと考えられる。全永女が自宅で保管していたノートの中には、植民地期に教育を受けて教師となり、朝鮮語の使用を抑圧する立場に立たされた「伯父さん」を振り返る記述もある(第6節(3))。植民地時代に受けた教育の意味について、全永女は繰り返し自問してきたと思われる。

その他、この項に現れるエピソードについていくつか補っておく。まず警官にチョゴリのひもを引きちぎられた人がいるという「うわさ」と関連して、1941年9月の新聞には、鶴橋署の警察官と協和会(在日コリアンの官製団体)の委員が、御幸森の朝鮮市場で「朝鮮服」着用者の住所氏名を取り調べ、今後は着ないように誓約させたという記事がある。それより前の1934年には、鶴橋署に署長を会長とする「鶴橋生活改善組合矯風会」が設置され、衛生などの「生活改善」とともに祝祭日の「国旗」掲揚励行や和服裁縫講習会、シャーマニズムの廃止などに取り組んでいた³⁵⁾。在日コリアンへの同化圧力が日常生活習慣のレベルにまで及んでいたことが窺われる。

また1940年に実施された創氏改名についての記述もある。いわゆる創氏改名は、法的には「創氏」と「改名」とに区別される。朝鮮における「姓」は男系の血縁集団の標識であり、男女ともに結婚しても変わることがない。創氏とは、上の意味の姓とは別に戸ごとの「氏」、つまり日本と同じように戸籍を単位として共有される氏を設定させたことを言う。創氏は法的義務であり、期日までに氏の設定を届け出なかった戸については、戸主の姓を氏と読み替える措置がとられた。一方で名を日本式に改める「改名」は法令上、個々が任意に行うものとされた。朝鮮総督府がこうした政策をとったのは、日本的な家父長制の導入により、戦争へのより強力な動員を図るためであったと考えられる³⁶⁾。

この手記から、全永女の家族も「氏」は設定したことが読み取られる。あるいは済州島に戸主、例えば全永女の祖父がいて創氏届を提出すれば、日本にいる全永女らも自動的に同じ氏を使うことになったはずである。一方で全永女の父親は、「名」については改めることを拒み、全永女にも日本式の名前にすることを許さなかったのである。

太平洋戦争中の学童疎開についての記述があることも注目される。1943年に始まった学童疎開は、子どもの安全確保というよりも空襲の際の“足手まとい”を減らすための施策であった。地方の親類を頼れる場合は個々に縁故疎開し、そうでない者は合宿形態での集団疎開が行

われた。御幸森国民学校では奈良市の猿沢池の近辺にある 7 つの旅館に 515 名の児童が分宿した。全永女の手記にもあるように、1945 年 2 月 10 日には旅館の火災で 4 年生の男子 2 名が亡くなったという³⁷⁾。ただし全永女自身は縁故疎開にも集団疎開にも加わらず、大阪に残っていた。コリアン児童と学童疎開の関係については、なお検討が必要である³⁸⁾。

(3) 大阪空襲³⁹⁾

大阪では 1944 年 12 月 19 日から 1945 年 8 月 14 日まで 50 回を超える空襲があり、そのうち 8 回は 100 機以上によるいわゆる「大空襲」であった。死者・行方不明者 1 万 5000 人以上、罹災者 122 万人以上の被害があったとされる。

手記では空襲についての記述が二度現れる。一つ目は (2) の末尾、全永女の国民学校卒業式の前日にあった空襲で校長が罹災したという記述である。これは 3 月 13～14 日の第一次大阪大空襲を指す。この空襲では 274 機の B29 が焼夷弾 1,733 トンを投下し、死者 3,987 人・行方不明者 678 人を出したとされる。二つ目が (3) に書かれた 6 月 15 日の第四次大阪大空襲で、444 機の B29 が焼夷弾 3,157 トンを投下し、死者 477 人・行方不明者 67 人の被害を出したとされる。この時に御幸森国民学校が焼失したことは全永女も記している通りである。また御幸森の朝鮮市場（現コリアタウンの南側裏手にあった）の東半分もこの時に焼失している。

上に示した数値から空襲の被害状況は詳細に分かっているように見えるが、これは被災直後の警察の緊急調査を踏襲したもので、実際の被害はこれを上回るものであった。日本政府はその後、政府と雇用関係にない民間戦争犠牲者への補償は行わないという立場をとり、被害実態の詳細な調査は現在に至るまで実施していない。当時大阪府には労務動員の対象者を含め 20 万人を超えるコリアンが居住していたとみられ⁴⁰⁾、空襲被害者の中にも相当数のコリアンが含まれたはずだが、実態は明らかでない。

2019 年には大阪空襲を調査してきた民間グループが「大阪空襲 75 年朝鮮人犠牲者追悼集会実行委員会」を結成し、コリアン犠牲者の調査・記録と追悼の取り組みを行っている。同会呼びかけ人の横山篤夫によると、敗戦直後に作成された「内地在住朝鮮人戦災者概数」が大阪府におけるコリアンの戦災者数を 239,320 人としており、これは大阪府の戦災者総数の 8.19% にあたる。同資料に死者に限った数値はないが、大阪府の戦災死者数 1 万 5000 人にこの割合を掛ければ、在日コリアンの死者数は 1,200 人以上であったはずだと横山は見積もっている。

(4) 飢餓

この項について補足すべきことはないが、戦争が日常の食生活にまで影響を及ぼしたことで、戦意高揚を煽る政府のスローガンに疑いが兆したという叙述が印象的である。

(5) 母との別れ

全永女は1945年3月に国民学校を卒業し、直ちに仕事に就いた。「ヘップみたいな、こんな小さい可愛らしい、手に乗るような」子供用の靴を作っていたという⁴¹⁾。

この頃の日本における義務教育年限は6か年・国民学校初等科までであった。1943年には国民学校高等科まで含めた8か年の義務教育が実施される予定であったが、戦局の悪化によって延期されていた。国民学校初等科が小学校と改称され、新たに設けられた中学校とあわせ、義務教育年限が9か年となるのは1947年4月である。



図4) 全永女の母親 (撮影時期不明)

全永女が国民学校初等科を卒業した頃、上級学校に進学した人の割合はどの程度だったのだろうか。やや時期が遡るが、1938年3月に実施された調査によれば⁴²⁾、この年の尋常小学校(のちの国民学校初等科)卒業者のうち、何らかの上級学校(中学校・高等女学校・実業学校・高等小学校・青年学校・その他)に進学した者の比率は、東京市では男児89.8%・女児88.7%、東京市以外では男児92.0%、女児80.9%であった。義務教育ではないとはいえ、男女とも80%以上は何らかの形で進学していたことになる。

全永女は手記で「中学校へ通っているお友達がうらやましく」と書いている。また2018年の朴才瑛によるインタビューでも「小学校を卒業後みなは中学校に上がりましたが、わたしはその間、靴の底はりの仕事をしていました。中学校に行った同級生たちがうらやましくて仕方がなかったのです」と述べている⁴³⁾。上述のように新制中学校の設置は1947年であり、この回想は正確でないが、初等科の友人の多くが何らかの上級学校に進学したという意味でならば、実感を反映した言葉であったと思われる。

勉学への憧れを募らせていた全永女は、1945年末、帰国する母親を振り切る形で日本に残り、肺結核の療養のため残留していた父親と暮らすことになった(第6節(1))。先の朴才瑛のインタビューによれば、その頃長姉は既に済州島に帰っており、結婚していた次姉は日本に残ることになっていた。母親は日本で生まれた妹と全永女を連れて済州島に帰るつもりだったが、全永女は「帰国のための荷物を、自分のものは自分で、オモニのものとはわざと別に二つに分けておき、出航の直前に「わたしは乗らない」といって日本に残りました⁴⁴⁾。また2020年のインタビューでは「お母さんに悪いことしたんですよ。残るってその〔乗船の〕時に初めて言ったんです。帰ったら、野良仕事するっていうのは分かっているからね。」と語っている⁴⁵⁾。

母親らがどのような経路によって帰ったかは明らかでない。日本の敗戦時、日本国内には労務動員の対象者30万人、軍人軍属10万人を合わせ約200万人のコリアンがいたとされる。

そのうち 140 万人は 1946 年 3 月までに朝鮮に戻った。そのうち日本政府の手配した船で帰還したのが 100 万人で、40 万人は自力で船便を調達したという⁴⁶⁾。大阪と済州島の間を結んでいた「君が代丸」は、1945 年の空襲により大阪湾で沈没していた⁴⁷⁾。梁永厚によれば「朝鮮人が多住する大阪は、帰国者の一時的経由地となって 100 万人ちかくが集中し、弁天埠頭や尻無川の河口・境川には、帰国者の列があとをたたず、かれらに傭船された多くの小型機帆船が年末ごろまで朝鮮海峡を往来した。なかには機雷に触れ被害をうけたり、死没するものも多かった」という⁴⁸⁾。

その後、母親は二度にわたり全永女を連れ戻すため日本に入国を試みたが、いずれも摘発・送還された。1946 年頃には在日コリアンの帰還は一段落しており、米軍占領下の朝鮮における暮らしや政治情勢の厳しさから、日本に戻る人も現れていた。しかし占領軍はいったん引き揚げたコリアンが日本に戻ることを禁じ、違反者は強制送還することとした。表向きの理由はコレラの防疫であったが、実際には再入国したコリアンが犯罪やヤミ市の運営に関わっていると見た日本政府が占領軍に働きかけたものであった⁴⁹⁾。1946 年 4 月～12 月に「不法入国」として検挙されたコリアンは 19,107 人、強制送還されたのは 26,032 人である。以後は漸減していくものの、1960 年代前半まで毎年 1,000 人以上のコリアンが検挙・送還された⁵⁰⁾。

結局、全永女と母親が再び共に暮らすことはなかった。全永女は母親の臨終に立ち会った時の思いをインタビューでこう語っている。

私を連れに来て、また言葉が分からないから捕まって、それで最後は裁判になって。その時は私が出て行きました。お母さんが、言葉ができないからね。〔中略〕私のためにこんな思いもしてね。母が出てきた時にはね、裁判になった時にはね、とにかく今でも思い出したら、あの姿を。でも帰った後、私が、自由に行き来できるようになった後にね、母親がもうほとんど声あまり出ないのに、来てくれてありがとうって言って、亡くなっていました。ありがとうはないだろうと思ってたんだけど。ショックやね、思い出したら。

でも私が助けられたのは、来てくれてありがとうって、亡くなる時に言うてくれました。それで裁判する時は、もう私はたまらなかつた。だからだいたい私は、親不孝者なんですよ⁵¹⁾。

母親の没年は確認できていないが、上のインタビューでは「自由に行き来できるようになった後」と述べており、1965 年に日韓基本条約が締結された後のことと思われる。先に掲げた図 2 もこの時に撮影された可能性がある。

なお手記のこの項は、「お母さんごめんね！ありがとう」という全永女の呼びかけで終わる。

実際に全永女は、近親者を含む第三者との会話の中では、自分の母親を「お母さん」と呼んでいたようである。しかし直接に母親に向かっては「オモニ (어머니)」と呼びかけることが普通であった⁵²⁾。全永女が手記で「お母さん」とした意図は不明だが、在日コリアンの言語生活の一面を示すものとして書き留めておく。

(6) 学生生活 ①建国学校への進学

全永女は母親の帰国後、設立準備中だった建国高等女学校・建国工業学校の生徒募集に応じ、1946年4月に前者の開校1期生として入学した。手記によれば、生野区界限で学校関係



図5) 「피리반도 [ピリバンド]: 記念 1946.9.20 建国高等女学生」

※ピリは朝鮮半島で用いられる小型の縦笛

者が希望者を募っていたので誰にも相談せずに応募したという。校長李慶泰の回想によると、1946年3月に生徒募集のポスターが完成し、ダットサンに乗って生野、西成、布施など日コリアンの多い地区に貼って回ったということであり⁵³⁾、全永女の記憶と符合する。

建国高等女学校・建国工業学校の校舎は、大阪市住吉区の大阪機械工学校跡に設けられた。開校初年の生徒数は両校合わせて225名であった⁵⁴⁾。翌1947年、両校は合併して男女共学となり、日本の学制改革に準じて建国中学校と改称した。その際に1期生の一部は飛び級によって3年次に編入された。1948年4月には建国高等学校が開校され21人が入学した⁵⁵⁾。全永女も飛び級組



図6) 建国高校時代
(裏面に「一九四八年六月十二日 土曜放課後」とあり)

の一人であり、高等女学校の入学から満 5 年後の 1951 年 3 月に高校 1 期生として卒業している。全永女はその期では唯一の女子生徒であった⁵⁶⁾。

全永女が校長の李慶泰に特に目を掛けられ、終生感謝の念を抱いてきたことは第 3 節で述べた通りである。李慶泰は、生活の困難から退学の危機にあった全永女を押しとどめ、授業料を免除したり、学校でのアルバイトをあっせんする等して勉学を続けさせた。肺結核を患っていた父親が死去した後には、全永女を自宅に住ませた(第 6 節 (2))。全永女の成績が優秀であったことに加え、唯一の女子生徒が気がかりだったこともあるだろう。

建国学校と李慶泰について、やや詳しく触れておきたい⁵⁷⁾。建国学校は在日コリアンの企業家、曹圭訓(1906～2000年)によって創設された。曹圭訓は済州島朝天里に生まれ、1923年頃神戸に渡りゴム工業や船舶事業、山林業などに携わった。日本敗戦後の1945年9月に白頭同志会を設立し、建国工業学校・建国高等女学校を開くに至った⁵⁸⁾。白頭学院は白頭同志会を引き継いだ両校の運営母体であり、現在まで学校法人の名称となっている。曹圭訓自身、その設立代表委員・理事長を務めた(1946～52, 57～60年)⁵⁹⁾。

曹圭訓および白頭同志会が工業学校を開設したのは、いずれ帰国するにせよ祖国に寄与できる技能を養っておくべきだという考えからだったといい⁶⁰⁾、曹圭訓が製造業の事業家であったこととも関係するだろう。注目されるのは高等女学校をあわせて開設したことであり、在日コリアンの女性を対象とした中等教育機関としては、最初期に設けられたものと考えられる。初等教育を終え、より高い教育の機会を求めていた全永女が、他の朝鮮人学校ではなくこの学校に進路を定めたのも、そうした理由によると思われる。

建国学校の初代校長李慶泰(1911～99年)は、慶尚南道亀浦に生まれ、1932年に渡日、1940年に関西大学法律学科を卒業した。1942年から初芝商業学校などの教員を務めていたが、義弟が曹圭訓の伐木事業の責任者であったことを契機に白頭同志会に加わり、建国学校の設立に協力した。

建国学校の特徴として、当初から日本の学校制度に準じた教育体系をとったということと、南北いずれにも偏らない自律的な運営を志向したということの二点が挙げられる。以下、1974年の李慶泰と校友会の朴炳閔による対談記事(注 57 参照)を通じて見てみたい。

一点目について、建国学校の運営母体である白頭学院は1949年5月に財団法人に認可され、さらに51年3月には学校法人への改組を認められた。詳細は改めて検討したいが、建国学校は財団法人に認可された1949年5月以後、学校教育法(1947年施行)による各種学校ないし学校(いわゆる一条校)に認められたと考えてよい⁶¹⁾。裏返せば1946年の設立当初の建国学校は、法令上の根拠のない任意団体であった。それにも関わらず、建国学校が日本の学校制度に準じた体制を当初から整えていた理由について、李慶泰は1974年の対談で次のように回想している⁶²⁾。

〔学校の〕認可の申請は、私はこの学校の看板を掛ける前から、大阪府にくれるよう申請していましたよ。なぜかという、人間が社会生活をするのに、社会でちゃんと認めてもらえない資格でもって、どうやって暮らしていけますか。わが国〔朝鮮〕の学校であり、わが民族を教える学校だからといって、日本の学生が受けている待遇や資格は、受けなければいけないでしょう。総連や民団系統の学校があるけれども、大学に行く資格がないのは大きな問題でしょう。私はすべて認可を受けなければいけないと思いますよ。

同じ対談で李慶泰は、学校の設立前から大阪府庁に赴いて認可を求め、日本学校と同等の資格を与えるよう要求していたとも語る。李慶泰は建国学校の設立時から、日本の学校制度の体系のなかに自校を位置づけ、将来的な高等教育への接続も視野に入れていたと考えられる。日本敗戦後に各地に設けられた国語講習所や朝鮮人学校がもっぱら帰国を念頭に置いて運営されていたのとは対照的で、建国学校の大きな特徴といえる。

李慶泰は開校にあたり、大阪の教職員名簿からコリアンと思われる名前を書き抜いて一人一人打診したというが、数学や理科、英語などの科目では日本人、イギリス人の教員を招いている。例えば数学の越智治成は、建国学校に近接する大阪市立大学の助教授であり、非常勤講師として勤務したようである⁶³⁾。教育用語の中心は日本語であったと見られるが、これについて李慶泰は、1974年の対談で次のように語っている。

とはいえ〔日本の教育当局の認可を〕受けるとすれば、ある程度の制限はありますから、わが国の純粋な教育をするのが難しいという点は、私が現在まで感じているジレンマです。〔朝鮮の〕国内ならば朝鮮語で、朝鮮語の教科書で、われわれ自身が考えるように教えられるのですが、少なくとも〔日本の〕資格のとおりやろうとすれば、日本の教科書も使わなければならない。実にジレンマを感じます。

二点目について、李慶泰はこの対談で、建国学校は創立当初から在日本朝鮮人連盟（朝連）の傘下にはなかったと述べている。1945年10月に結成された朝連には当初、多様な来歴の人びとが関わっていたが、次第に社会主義者の影響が強まり、48年9月に朝鮮民主主義人民共和国が成立すると、これを支持する。一方、こうした傾向に反発する人びとは46年10月に在日本朝鮮居留民団を結成し、48年8月に大韓民国が成立すると、これを支持して在日本大韓民国居留民団（民団）と改称する。多くの朝鮮人学校は朝連の影響下にあった。

建国学校は朝連と一線を画す一方、民団を支持したわけでもない。建国学校は創設当初、韓国併合以前からの国旗である太極旗を掲げ、植民地期に作曲された愛国歌を歌っていたが、1948年に朝鮮半島の南北に分断国家が成立すると、韓国側の国旗・国歌となった太極旗・愛

国歌を用いなくなった⁶⁴⁾。1974年の対談で李慶泰は「その時の政権の影響を受けないのが学問をする者の姿勢」と述べ、「教育の自主性、学院の自律性」を特に強調している。

だがこうした姿勢を堅持することは容易ではなく、両陣営からの取り込み工作と非難に直面することになった⁶⁵⁾。これを1974年の対談では次のように振り返っている。

実際のところ、解放直後には連盟〔＝朝連〕が経営する民族学校が多数ありました。初めは大同団結という看板の下で民族教育をしていましたが、途中から連盟が分裂したでしょう。つまり建設同盟〔＝新朝鮮建設同盟か。1946年1月成立〕ができて、それが現在の民団に発展しましたが、分裂以後、連盟はわれわれの学校を指して「反動」、民団は「アカ」、こう呼んだでしょう。われわれは、連盟の学校でもないし、民団の学校でもないのです。われわれは、白頭同志会が自主的にこの学校を創立したのです。

李慶泰は体調不良を理由に1974年8月に校長を辞任した。一方で白頭学院の当時の理事長は1967年頃から韓国政府に資金援助を働きかけていたといい、李慶泰の辞任の前から、学校の運営方針をめぐる意見の相違があったと考えられる。韓国政府の財政支援は1976年に実現し、理事会は韓国系民族学校としての立場を明らかにした⁶⁶⁾。1977年8月15日には太極旗が建国学校に掲揚され、その路線転換を印象付ける事件として、韓国でも報道された⁶⁷⁾。

(6) 学校生活 ② 阪神教育闘争

全永女の手記には、建国学校での学校生活そのものについて、詳しくは述べていない。当時の李慶泰校長や教師陣の思い出については『白頭学院創立60周年記念誌』に文章を寄せているが⁶⁸⁾、紙幅の制約からここでは再録しない。ただ、全永女が在学中に遭遇した阪神教育闘争については、在日コリアンの教育史においても重要であり、ここで触れておきたい。

教育基本法と学校教育法が施行された1947年4月、日本の文部省は、コリアンの児童も日本の教育法令の適用を受け、日本人と同様に就学する義務があると通達した。48年1月の通達「朝鮮学校の設立の取扱いについて」ではさらに踏み込んで、コリアンの児童も学校教育法に基づく公私立学校に就学させなければならないとした。こうした日本政府の姿勢は、日本に残るコリアンは日本国籍を保有するものと見なし、日本の法令に従うよう規定した占領軍の方針(1946年11月)を踏まえたものであった。しかし1947年5月の外国人登録令が、コリアンを「外国人と見なす」として対象に含めていたことを考えれば、日本政府の姿勢はコリアンの管理を優先した二重基準であった⁶⁹⁾。

1947年10月の在日本朝鮮人連盟の調査によれば、コリアンの民族学校は初等学校541校、中等学校7校、その他30校あったという⁷⁰⁾。これらはいずれも日本政府の認可を受けておら

ず、1948年1月の「朝鮮学校の設立の取扱いについて」は事実上、民族学校の存在を否定したものであった。実際に1948年3月から4月にかけて、各都道府県は法令違反を理由に朝鮮人学校の閉鎖を命じた。これに対する反対運動が各地で盛り上がったが、特に大規模だった神戸・大阪の運動は阪神教育闘争と呼ばれている。

その経過について詳しくは省略するが、4月23日に大阪府庁、4月24日に兵庫県庁がコリアンのデモ隊に占拠され、同日占領軍は神戸に非常事態宣言を発した（そのため、この事件を四・二四教育闘争と呼ぶこともある）。4月26日には再び大阪府庁前で大規模な抗議集会が行われたが、警察はデモ隊の即時解散を命じ、警官の発砲で16歳の金太一が死亡した。

この頃の建国学校は無認可校という点で他の朝鮮人学校と同じ立場にあり、李慶泰は他校と共闘する姿勢をとった。生徒のデモ動員には消極的であったが、急進的な生徒の動きを抑えられず、父兄会の同意と協力の下でデモに参加することになった⁷¹⁾。この時のデモには全永女も参加しており、2019年のインタビューで次のように語っている。

あとで北朝鮮に帰国することになる金時習というリーダーの学生がいまして（彼は建国ののちに学習院に行きました）、先生たちに「こんな大事なときにどうして黙っているのか、皆で参加したい」というと、学校側は教育闘争に生徒を連れて行く場合はPTAにはからなければならぬ、という返事だったそうです。当日は皆で大阪府庁前の公園に行ったのですが、四人ずつ並んでスクラムを組んでも立ってられずバラバラになるくらいの強い消防車の放水を浴びました。それは普通の勢いではありませんでした。そのうち、パンと音がして負傷者が出て、危ない！ということで、わたしは地下において逃げました⁷²⁾。

何日のデモに参加したかは明確でないが、全永女の聞いた「パン」という音が金太一たちを撃った銃声であるならば、4月26日のことと思われる。

この後の民族教育についても簡単に触れておきたい。建国学校が当初から日本の法令に基づいた学校運営を目指していたことは先述した通りである。李慶泰の回想によれば1948年の学校閉鎖命令の後、大阪府から学校認可の申請を促してきたが、同時に申請した朝連系の学校が却下されるなかで、建国学校と民団系の金剛学園だけが認められたという⁷³⁾。先述の通り、白頭学院が財団法人に認められたのは1949年5月、学校法人となったのは1951年である。

1948年4月当時、朝鮮人学校（小学校）は全国で566校・児童48,930人を数えたが、学校閉鎖命令を経て、49年7月には331校・34,415人となった⁷⁴⁾。相当の減少を見たものの、なお多くの学校が無認可のまま運営を続けていたことが推測される。しかし1949年9月、日本政府は「占領政策に違反する団体」として在日本朝鮮人連盟を解散させ、朝鮮人学校についてもその影響下にあるものとして、ほとんどを閉鎖させた。その際には武装警官を学校に投入

し、抵抗する教員や児童・生徒を排除するという強硬手段もとられた。一部の都市にはコリアンを対象とする公立学校も設置されたが、大半の児童・生徒は既設の公立学校に編入された。

1952年4月にはサンフランシスコ講和条約発効とともに日本政府がコリアンの日本国籍を喪失させたことで、コリアンは義務教育の対象からも除外された。その後、各地で在日コリアンを対象とした学校が再建または新設され、今日に至っている⁷⁵⁾。一方で1948年6月には大阪府がコリアンの代表者との間で覚書を結び、公立の小中学校でも「課外の時間に朝鮮語、朝鮮の歴史、文学、文化等について授業を行うことが出来る」と定めた。この覚書に基づいて、現在まで続く公立学校の民族学級が設置されることになった⁷⁶⁾。

(6) 学校生活 ③大阪女子大学への進学

1951年3月に建国高校を卒業した全永女は、同4月、大阪府立大阪女子大学生活科学科に進学した。手記によれば、全永女は苦しい経済状況から大学進学を諦めていたが、李慶泰の強い勧めで進学したことが分かる。制度的に言えば、建国学校が一条校の認可を受けていたことで、他の民族学校のような大学受験の制約がなかったことも重要である。

ある調査によれば、1954年の18歳人口171万人余りのうち、四年制大学に進学したのは男性13.3%、女性2.4%に過ぎなかった⁷⁷⁾。全永女が入学した大阪女子大学は、1929年に府立女子専門学校として開校した。校地は住吉区帝塚山東にあった。1949年に新学制のもとで大阪女子大学に改組され、人文学部国文学科・英文学科・社会福祉学科・生活科学科の1学部4学科が設置された。全永女が受験した1951年度の大阪女子大学の入学者選抜の状況は、志願者495名に対し合格者189名、競争率2.6倍であった⁷⁸⁾。

入学試験の様子について、全永女は現在も鮮明に記憶しており、筆者たちのインタビューに詳しく答えてくれた。いずれもささやかなエピソードだが、李慶泰一家との深い交流をうかがわせるものでもあり、紹介しておきたい。



図7) 大阪女子大学時代
(裏面に「1952.9.7」)

奥さん〔李慶泰の妻・廉命任〕がね、もう試験前でね、〔全永女が〕ボロボロの服なもんでね。急いで〔きれを〕切って〔仕立て〕、紺色でボタンをいっぱい付けてた。

せっかく〔廉命任が〕してくれたのにね。テストになったらね、入試問題にミスがあったんです。物理だったんですけどね。〔中略〕比例と反比例だけのことですよ。それで手をあ

げたら〔担当者が〕来てね、これはちょっとミスなんですけどね、比例って書いてあるけれども、反比例じゃないんでしょうかって言ったらね、あんまり読みもしないでね。おそらく作った人がちゃんと確認してるやろうということだね、今でも忘れませんよ。「間違えていません!」、「せん」に力が入ってたんですよ。「せん」と一緒に、ああこれで滑ったと、力がどんと抜けたんですよ。そうしたらそこでね、ガヤガヤ、ガヤガヤして。〔中略〕そうかなと思ったら、鎮まったんですよ。そうしたらその、「間違えていません」って言った先生がね、わざわざやってきて、先ほどはどうもすいませんでしたって。やっぱりミスでしたって、丁寧に謝ってくれまして。それが嬉しかったんですよ。それでね、うちに帰ったら、李先生がね、校長先生がすごく喜ばれてね。

発表の時には、お友達が二人、私以外に二人おったんですね、三人で行って。ちょっと騙そうと言うて、校長先生のサモニム〔廉命任〕に、いや滑りましたわと言うて。そうしたら、あら滑ったのって言うて。嘘をついてね、それで、いや通ったんです!って言うてね⁷⁹⁾。

試験を終えて帰ってきた全永女に李慶泰が手作りのおやつを食べさせた情景が手記にあるが、このことは、李慶泰の娘の李智恵もよく覚えていた。李智恵によれば、李慶泰が作ったのは（全永女が記憶する）プリンではなくミカン入りの寒天だった。当時の卵は高価で気軽に使える食材ではなかった。李慶泰は全永女が帰ってきたら食べられるよう、李智恵にも手伝わせながら、あらかじめ作っていたという⁸⁰⁾。

全永女の大学生活について詳細は明らかでない。教師時代の教え子である金美優（建国高校14期）が本人からの聞き取りをもとにまとめた文章を引用しておく。「大阪の公立大学の名門、大阪女子大学に入学した彼女は、周りを見回すと、ほとんどが関西の上流家庭のお嬢さん達で、その中には大臣の孫もいたそう。選ばれし家庭の女性の中で彼女の様に粗末な身なりの女性は一人もいなかった。学友の中で、ただ一人、彼女の友となった人がいた。地方から出てきたその友人は共産党を支持していた人だったが、彼女の苦境を察し、月初めに故郷から仕送りが来ると、必ず彼女を誘って何かを食べに連れて行ってくれたそう。」⁸¹⁾。

(7) 奨学金

この項については前後の脈絡が欠けており、何年のことか不明だが、李慶泰と同様、手を差し伸べてくれた恩人への感謝の気持ちを込めて書かれたものと考えられる。

その中で、国籍についての記述があることが注目される。先述のように、日本政府は敗戦後も、講和条約の締結までコリアンは日本国籍を保有しているという立場をとっていた。サンフ

ランシスコ講和条約が締結されたのは 1951 年 9 月，発効したのは翌 52 年 4 月 28 日である。これに伴い日本政府は，法務省民事局長通達により，コリアンの日本国籍を一方的に喪失させた。全永女も自身の意志の及ばないところで日本国籍を失ったことになる。手記の通りであれば，担当者が「日本国籍を取りなさい」と勧めたのは，それ以後のことかと思われる。ただし当時の在日コリアンの「国籍」の法的性格について，奨学金の担当者が十分に理解してこのように助言したかは，この文章だけでは分からない。

国籍は卒業後の進路選択にも大きな壁となった。『白頭学院創立 50 周年記念誌』の卒業生インタビューで全永女は，大学卒業後，「気象台からの話や，大学の助手の話があったが，国籍上，断念。自分のしたい職に就けない」と述べている⁸²⁾。外国籍の保有者は公務員になれないという法律上の規定は存在しないが，内閣法制局は 1953 年 3 月，「当然の法理」という言葉を用いて，「公権力の行使又は国家意思の形成への参画にたずさわる公務員となるためには日本国籍を必要とするものと解すべき」という見解を示した。その後，公務就任権は在日コリアンの人権運動の焦点の一つとなり，少なくとも自治体がこれに応じるようになったが，日本政府の立場は現在まで変わっていない。



図 8) 建国学校教員時代
(撮影時期不明)



図 9) 建国学校教員時代 (1961 年頃、建国高校 14 期生とともに)
(金美優提供、中段中央全永女、中段左端金美優)

優秀な成績にも関わらず研究者の道を断念せざるを得なかった全永女は、1955年春の卒業とともに母校の白頭学院に戻り数学の教師となった。当時の教え子の回想によれば、当時の建国学校には通常の学齢を過ぎてから入学する者も多く、小柄な全永女は「どちらが生徒か先生か分からない」ような様子であったという。しかし生徒に厳しくも真摯に向き合う姿勢は信頼を寄せられ、結核のため1年間休職して療養した時には、途切れなく生徒が見舞いに訪れた。退職の後は生野区のコリアタウン近くで学習塾を開き、ここでも多くの子どもの生活面を含めた指導を続けたほか、非識字の女性たちのために手紙の読み書きを手伝うなどしていたことが、周囲の人びとの印象に残っている⁸³⁾。

5. 補論 —— 記憶の継承

周囲の人びとによれば、全永女は自身の過去について、ほとんど話したことがないという。全永女は現在まで韓国籍を保有しているが、長女のMさん（1968年生まれ）が日本国籍の取得について相談した際には、自身の意見は言わず、「あなたのことは自分で決めればよい」とだけ伝えたという⁸⁴⁾。また孫のWさん（2001年生まれ）が韓国のことを聞こうとしても、「もうあなたたちには関係がないから」「あなたが韓国にルーツがあるということは、わざわざ言わなくてもいい」という姿勢だったという⁸⁵⁾。

これに関連して、全永女は朴才暎による2018年のインタビューで次のように語っている。「ヘイト・スピーチなどは許せないし、孫が韓国の本を読んでくれと持ってきたりすると嬉しいのですが。皆、不当な差別に屈することなく、堂々としてほしい。でも、このまま日本に暮らして彼らが日本人になっても、それはそれで仕方がないことだと思っています⁸⁶⁾。日本社会の差別的な状況がむしろ深刻化するなかで、ルーツの継承に複雑な思いを抱いていたことが窺われる。一方で子どもたち自身に選択を委ねたという点では、2002年の中学生向けの講演で述べた、「自分を大切にし、自分の頭でしっかり考えられる人間になってほしい」という思い（第3節参照）が貫かれていたと見ることもできよう。

家族は全永女の記憶をどのように受け止めているのだろうか。筆者（石川）は全永女の孫Wさんに本稿の草稿を提示し、感想を求めた。Wさんから寄せられた文章は、在日コリアンの記憶が若い世代に、どのような文脈のなかで引き継がれているかを知ることができる資料として価値があると考え、第6節(4)に収録した。

6. 参考資料

(1) 大阪市立大領中学校での講演資料

【解題】全永女が自宅で保管していたファクスのコピーで、2002年7月11日に大領中学校から送信されている。これとは別に「2002年度大領中学校反戦平和学習の具体化について」という文書もあり、そこから2002年8月6日に全永女の講演が予定されていたことが分かる。このファクスがそれ以前に発信されていることから、講演の事前資料として学校側が全永女との打ち合わせをもとに作成したと思われる。以下、〔 〕は手書きによる加筆であり、それ以外はワープロ打ちとなっている。

全永女 (チョン・ヨンニョ) さんのお話

<略歴>

- 1932年4月 濟州島で生まれる。
- 1935年8月 母と2人の姉とともに大阪市生野区に。(父のもとへ)〔漢方医・金属〕
- 1939年4月 生野第四尋常小学校に入学。(2人の姉は学校へ行かず)
- 1941年4月 第四尋常小学校が御幸森国民学校に変わる。〔戦争が始まった年。国民を育てる(天皇の赤子)〕
- 1945年3月 御幸森国民学校卒業→靴張りの仕事に行く。
- 1945年8月 終戦
- 1945年末 母が濟州島に帰国(妹と)。自分は日本に残る。(父は、肺結核の療養で日本に残っていた)
- 1946年4月 白頭学院建国高等女学校入学。
- 1947年 父、死去。校長先生の家に住まわせてもらいながら通学。
- 1951年 建国高等学校を卒業し、府立〔大阪〕女子大に進学。
- 1955年 大学を卒業し、建国学園〔学園に取消線、中高等学校〕の教員(数学)に。

<お話のポイント>

小学校では、創氏改名(1939年)で、日本名にすることになったが、父母は変えたがらなかった。姓は、一応大原にしたが、名は永女のまま。「日本人らしい名前にしてほしい」と訴えたが、父は譲らなかつた〔日本名(今の通称名に届け出なければならなかつた)。このため届けることなく本名のままにしていた。日本名にしなかつたのは私一人だつた〕。学校では、ゼン・

エイジョと呼ばれ、先生から、何度も「この戦争はどうなると思うか」というような質問を受けた。その度に、「神風が吹いて必ず日本が勝ちます」と答えていた。父は民族意識から名前にこだわっていたが〔なぜ名前（自分の名前）を違う名にしないといけないのか〕、母は日本語も知らず、その名前しか考えられないという状況だったと思う。母は、運動会にもチョゴリを着てきて、「ヨンニョ」と大きな声で詠んだ。そんな母のことが恥ずかしくてしかたなかった。母も「お前は私のことが〔ママ〕嫌っているだろう」と言っていた。学校には、御真影と教育勅語が治〔ママ〕めてある奉安殿があり、その前を通るときには最敬礼（90度の礼）をしなければならなかった。小学校4年の時、教育勅語事件というのがあった。奉安殿の前に、10人ほどの生徒が立たされている。どうしたんだろうとっていると、ひそひそ声で事情が伝わってきた。「チンハオモワズヘヲコイタ。ナンジシンミンクサカロウ。ギョメイギョジ」と、教育勅語をもじって遊んでいたことが分かって大問題になったのだ。その頃自分は、まったくの日本人で、教えられることにまったく疑問を持っていなかった。自分がむりやり日本に残ったことで、母は密航で捜しに来ては連れ返された。皇民化教育の中で育ったことで、母を恥ずかしく思い、母に辛い思いをさせたことが悔やまれる。〔今も母のことを思うと心がうずく〕

<全永女さんの伝えたいこと>

戦争中は、何も言わなかった父が、戦後、「日本にことばや〔文字〕名前を奪われた」と愚痴を言うことがたびたびあった。朝鮮人にとってひどいことばかりだったのに、自分はまったくの日本人という意識でいた。教育の力はすごく大きい。この経験から、自分の頭で判断しなければいけないことを学んだ。自分を大切に、自分の頭でしっかり考えられる人間になってほしい。

(2) 李慶泰先生に捧げる感謝のことば

【解題】本稿第3節で述べたように、2019年、全永女がケイビーエス(株)に発注して印刷に付した文章である。原文は縦書きで厚手大札紙に印刷されている。ここでは同社の電子ファイル（マイクロソフト社 Word, 2019年9月13日最終更新）を底本とした。

李慶泰先生に捧げる感謝のことば

私の生涯を振り返り、李慶泰先生から賜った御恩を忘れることができません。

ここにその御恩の一端を記して、感謝の気持ちを表わしたいと思います。

私は、一九四五年三月、御幸森小学校を卒業し、八月十五日には終戦を迎えました。当時、中学校は義務教育ではなかったので、卒業後私は働いていました。

その年の秋に、民族学校白頭学院（建国中学校）の生徒募集がありました。生野区界限では、直接学校関係者が通りを歩きながら、希望者を募っていました。

私は勉強したい一心で、誰にも相談せずに応募したのです。

学校は、一九四六年四月一日開校し、私は入学できました。

ところが私のばあい、父が病気で学費どころではありませんでした。父はその事情を書いて、退学届を私に持たせたのです。

私は、それを担任の先生に渡しました。するとしばらくして、校長室へ行くようにおっしゃいました。

校長室に行くと、ノートや鉛筆など学用品が置かれていました。李慶泰校長先生は、それらを私に下さって、「がんばりなさい」と励ましてくださいました。

ほんとうにうれしかった。

それから授業料の免除はもちろんのこと、学校の給品部で授業と授業の間の休憩時間に文房具の販売の手伝い、昼食時には、パンや牛乳などを売って、学業が続けられるようにしてくださったのです。

父は私が中学二年の時に亡くなり、私は夏休みや冬休みの学校の休暇にはアルバイトをしていました。

そのようにして高校二年になったとき、先生の自宅から学校に通うようにと声をかけてくださいました。それから私は、先生宅で生活することになりました。

ところがその頃、学校を支えてくださっていた曹圭訓理事長の事業が悪化し、学校の運営資金が途絶えてしまい、先生が遠方まで寄付をお願いに出かけたりして大変な苦勞をしておられました。

私はそのような時、大学進学など考えもしていませんでした。

ところが、大学進学適正検査（今の大学センターテスト）の願書提出締め切り前日に、先生が「願書は？」と声をかけてこられました。私は黙って首を横に振りました。

すると先生は慌てられ、学籍簿にあった中学校入学時の写真をはがし、願書に貼って申し込んでくださいました。当時は即日写真がなかったのです。また受験の日に着ていく服を心配され、廉命任サモニムが服を縫ってくださったことも忘れられません。

大学受験の日、入試問題にミスがありました。それをその場で試験官に指摘することが出来ました。そのことを先生にお話すると、大喜びされました。そして自らプリン等、おいしい

食べ物を作ってくださいました。その味のおいしかったこと、うれしく忘れ得ない思い出です。

先生はまた、私が大阪府立女子大学（生活科学科）に合格し、大学三回生の時、裕福な家庭の生徒の住み込み家庭教師のアルバイトを紹介してくださいました。

おかげで四回生のたいせつな時期、大学のことだけに専念することができ、とても助かりました。

大学卒業後、教師として母校に勤務していましたが、数年たったころ肺結核に罹りました。当時はまだ大変な病気だったので、阿武山日赤病院に入院しました。先生には本当にいろいろご心配、ご苦勞をおかけしてしまいました。

私が今日あるのは、李慶泰先生のおかげであると、常々感謝いたしております。

ここにその御恩のすべてを書くことはできませんが、私の心からの感謝を申し上げます。

二〇一九年十月

全 永 女 拝

(3) 「伯父さん」の回想

【解題】全永女がノートに自筆していたもの。作成年月日は不明だが、同じノートに引用されている書籍等の発表年から2007年以後と推測される。「伯父さん」が誰かは特定できていない。

書堂は読み書きを覚え先祖を祀るために学ぶ場所だった。

韓国では女の人なんかは論外で勉強せんでもいい。子供を産んで、家を守って、それが女の責務。男の場合は字が読めないと言うのは話にならない。最低自分の法事の時それをちゃんと書いて貼るわけ。それが書けないのではまともな人間ではないわけ。伯父さんは書堂から小学校に進学し卒業後一人中学校に進学するため済州を出る。彼が勤めることになる小学校の名簿によれば最終学歴は松江工業学校卒だ（松江は現在の光州広域市光山区にみられる⁸⁷⁾。伯父さんは無事に卒業し済州道に戻った。一九四二年のことだった。

裕福な家に生まれ、学歴を持ち一七歳で教師になった彼は日本へ留学を夢見た。

教員の職務の中には児童に朝鮮語〔を〕禁止することも含まれていた。一九四二年から国語常用運動が始まっていた。一九三八年の第三次朝鮮教育令公布以降、朝鮮半島内で広く展開された。日本語の使用を強制する強制である⁸⁸⁾。

(4) 「祖母のエピソード」

【解題】全永女の孫 W さん (学生, 2001 年生まれ) に本稿の草稿を提示し, 書いていただいたものである。底本は電子ファイル (マイクロソフト社 Word, 2021 年 7 月 1 日)。

祖母には, 私が小学校高学年ごろから毎週一時間近くかけて私の住む地域まで来て勉強を教えてもらっていました。祖母は 80 代に入っているにも関わらず現役時代の重いテキストをもって, 遠路はるばるやってきてくれて数学や英語の指導をしてくれていました。数学で難しい問題に私が苦戦していても簡単には回答を示さず, 一度基礎に戻ってからそれをうまく自分で応用して解けるようになるまで根気強く見てくれていました。そのかいあって中学時代に数学や英語に苦勞することはなく, 今では祖母の熱心な指導にとても感謝しています。

小さいころから家に来て, 面倒を見てくれていた祖母のことが大好きだった私は, 一人で電車に乗れるようになって月に数回, 祖母の住む鶴橋に遊びに行っていました。車を運転しない祖母はいつも私がつく前に駅まで徒歩で来て, 私を出迎えてくれました。お昼には私の好きな食べ物屋さんと一緒に行き, 帰りには駅の商店街や近くのコリアタウンと一緒に通りながら好きなものを買って祖母の家で勉強の合間に食べていました。そんな祖母の家や祖母の住む鶴橋が好きで, 時間を見つけては祖母のもとを訪れていました。鶴橋では祖母の元教え子の方が働かされている飲食店も多いため, そこに行くといつも教え子の方々が忙しい中挨拶しに来てくださり, 昔の話を懐かしそうになさっていました。そういった会話を聞いていると祖母が教師時代周りの人たちから愛されていたのだなと幼いながらも感じ, そんな祖母をもつことをいつもうれしく, また誇らしく感じていました。そのほかにも, 祖母の教え子さんたちが一人で住む祖母の食生活を心配して, 手作りのお料理をポストの中に入れてくださっていたり, 祖母を気にかけて毎日のように祖母をお食事に誘ってくださったりするなど祖母が周りの人たちから大切にされているのだなと感じたエピソードはたくさんあります。私は教壇に立つ祖母を見たことがありませんが, こういった元教え子からのお気遣いは祖母が現役時代に真剣に生徒と向き合い, 熱心な教育を行ったからこそ得た賜物なのだろうなと感じます。実際に祖母のことについてまとめてくださった文章からもそういった教育熱心な祖母の姿が描かれており, 現役時代の祖母の姿がうかがえました。

祖母が今までのどのような人生を歩んできたかについては口頭で断片的にしか知らなかったのですが, 今回石川先生はじめたくさんの方々のご協力によりこうして祖母が生きてきた時代の社会の動きや在日コリアンの方々が体験されてきた出来事などを詳しく知ることができました。私は大学に入ってまず英語圏での人種差別問題, 特に黒人差別やそれに伴って近年動きが活発化してきている Black Lives Matter 運動 (以下 BLM 運動) や彼らのエスニックアイデンティティについて詳しく取り上げて学んできました。黒人差別問題は人々の意識的問題だけで

なくアメリカの社会制度にも根強く存在しており、その不平等の是正を訴えている活動のひとつがBLM運動です。こうした人々の平等を唱える活動は多くの日本人にとってはどこか他人事で、日本には人種差別はないと考えて興味を示さない人もいます。こうした現状は潜在的な差別意識に無自覚で不当な扱いを受けている人々の現状から目を背けているからではないかと感じます。日本にも外国人差別は存在しており、特に在日コリアンの方々は現在でもヘイトスピーチといった精神的苦痛を受けるだけではなく日本の政治や社会制度によってエスニックアイデンティティを隠さざるを得ないと感じている人もいるはずですが、大学で人種差別問題について学ぶまではこうした日本の社会のマイノリティ問題に対して強く意識することはなかったのですが、そうした学びの中で改めて在日コリアンの方々が感じてきた苦悩や、社会から受けてきた理不尽な対応を学びその問題に自分らしく向き合う必要があると考えるようになりました。

実際に理不尽に国籍を変え、本人たちの民族意識を無視して日本社会に無理やりはめ込もうとしたり、逆に社会の輪から外され国民が平等に受けられるはずの権利へのアクセスを阻止したりなどといった日本の歴史が文章から見えてきました。また朝鮮人の民族教育の禁止や学校閉鎖、それに対するデモにとった日本政府の行動は、自民族の文化やアイデンティティを大切にしようとする人々の気持ちを軽視した自民族中心的なものだと感じました。また、祖母の民族意識を重要視する姿勢や在日コリアンの方々が直面する差別問題に立ち向かう姿勢には考えさせられる部分が多かったです。在日コリアンのみならず現在日本にいる多くの在日外国人がこうしたエスニックアイデンティティや差別問題に苦しみ、社会制度や人々の固定観念的な意識と戦い続けていると考えたためです。ルーツを隠さずともすべての民族が尊重され、どの社会でも平等に扱われる時代を作り上げるべくこうした在日の方々の歴史や意思を我々が受け継いでいき、新たな時代を作ろうとする意識を育てていく必要があると感じました。

話は戻りますが、祖母の私への勉強指導は私が中学二年になるまで続き、長距離移動が大変になってきたことや認知症の進行などを理由に私の中学3年への進級を節目に終えることになりました。指導してくれていた間、祖母は私がまじめに勉強をしないことを最も嫌い、私が祖母の長い教師生活の最後の生徒だと言って立派に成長することを心の底から願ってくれていました。当時の私は祖母のこれまでの人生で経験してきた苦労や努力を知りませんでした。祖母が勉強の合間によく私に言っていた印象的な言葉がありました。それは“Where there's a will, there's a way”（意志あるところに道は開ける）という言葉で、祖母が大切にしてきた言葉だそうです。強く自分の意思を持ち、それに向けて努力を惜しまなければ自ずと道は開けてくる、という意味のこの言葉はこれまでの祖母の人生を知ってから見ると感慨深いですし、その言葉を私に託してくれた祖母の熱い気持ちを考えると私も背筋が伸びる思いです。私はそんな祖母の背中や祖母に影響を受けた周りの人々をみて祖母と同じ教師という職業を目指して現在

大学に通っています。祖母の願いや自分を支えてくれている家族への感謝を胸に、すべての人のアイデンティティが尊重されるような社会の実現に貢献できるような教師を目指してこれからも頑張っていこうと思っています。

<注>

- 1) 略歴については第 6 節 (1) を参照。
- 2) この手記を石川が整理するに至った過程を述べておく。石川が全永女に初めて会ったのは 2020 年 10 月 12 日である。当時既に、生野区で地域活動に取り組んでいる足立須香 ((一社) ひとことつむぐ代表理事) が、林芳子 (임방자・イム パンジャ, ケイビーエス(株)・金美優 (김미우・キム ミウ, 元大阪市立北鶴橋小学校民族講師)・岩本典子 (大阪市外国人教育研究協議会事務局) と共に全永女のライフ・ヒストリーの記録を計画しており、石川もそれに参加することになった。本文に述べた理由で全永女のインタビュー継続が困難になった後、5 名の合議によって、本手記を中心とした記録の発表に方針を改め、石川がその実務作業を担当することになった。本稿の叙述の責任は石川にあるが、企画そのものは前記 5 名の共同企画である。また、このような形で手記を発表することについては、全永女及びご家族の了解を得た。
- 3) ここで利用した底本は、全永女の手書き原稿を林芳子がワープロに打ち直しプリントアウトしたもので、全永女が自宅に保管していたものである (以下、出力原稿)。原稿の冒頭行には「全永女先生 2017.11.18」とあり、その時期に成稿したものと推測される。他に手書き原稿と電子ファイル (マイクロソフト社 Word, ファイル名「全永女」, 更新日 2018 年 6 月 19 日) も確認している。底本とした出力原稿は、電子ファイルと基本的に同一だが、手書きで若干の修正が書き込まれている。翻刻にあたり出力原稿に書き込まれた修正を反映し、重要なものは注記したが、誤脱字など軽微なものは特に注記していない。手書き原稿も出力原稿と校合し、重要と思われる異同は注記して示した。底本の縦書きを横書きとしたが漢数字等の表記はそのままとした。項のタイトルと改行は原則として底本に従ったが、項の番号 (1) ~ (7) と [] で括った小見出しは石川が便宜的に付した。
- 4) 1923 年から 1945 年まで済州島と大阪を結ぶ定期航路に就航していた船。第 4 節参照。
- 5) 鶴橋第四尋常小学校。1924 年東成郡鶴橋町立第四尋常小学校として創設され、翌年の大阪市の市域拡張により大阪市立となった。大阪市立御幸森小学校 HP > 学校概要 > 沿革 (2021 年 9 月 18 日アクセス)。
- 6) 内鮮一体の「内」は日本本土 (「内地」), 「鮮」は朝鮮を指す。1937 年の日中戦争勃発後、朝鮮人を戦争協力に動員するため打ち出された標語。第 4 節参照。
- 7) 手書き原稿ではこの一文を「担任の松井先生は内鮮一体の考えで私達朝鮮・韓国人生徒に対する差別はなかった」とする。
- 8) 国民学校令 (1941 年勅令 148 号) により、同年 4 月 1 日から尋常小学校は国民学校と改められた。その目的は「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為ス」こととされた (同勅令第 1 条)。1947 年 3 月に小学校に改称された。
- 9) 「教育ニ関スル勅語」、教育の基本方針を示すものとして 1890 年に明治天皇の名前で発表された。1948 年 6 月 19 日に国会で失効が確認された。
- 10) 「大東亜決戦の歌」(伊藤豊太作詞, 海軍軍楽隊作曲, 1942 年) の一部。
- 11) 旧字は底本の通り。
- 12) この段は出力原稿では前段 (父母の思い出) の前に挿入されている。しかし手書き原稿では (卒業) の段の前にあり、文脈上もそのほうが自然であることから、配置を改めた。
- 13) 法務省大村入国者収容所。1950 年 12 月に設置されコリアンの「不法滞在者」の収容と集団送還の拠

点とされた。その後、インドシナ難民の収容等にも利用された。1993年に大村入国管理センターと改称された。

- 14) 白頭学院については第4節で詳しく述べる。
- 15) 1947年から1955年まで文部省が全国一斉に実施した試験。文部科学省 HP > 学制百年史 > 第2編第1章第4節7「高等教育機関入学者の選抜」（2021年10月19日確認）。
- 16) サモニム、韓国・朝鮮語で目上の人を敬って言う語。
- 17) 大阪の鉄鋼商社岸本家（現：泉吉株式会社）が従業員子弟の奨学事業のため1940年前後に報国積善会を設立したという。濱田氏はその役員であった（2021年10月20日同社担当者への電話インタビュー）。全永女と財団の関係については未詳である。
- 18) 1941年阿武野勝景園として高槻市に開設され、1948年に大阪阿武山赤十字病院となった。1970年に高槻赤十字病院に改称された。もとは結核専門病院だったが、結核病棟は1997年に廃止された。同病院 HP 掲載の病院沿革（2021年10月19日閲覧）。
- 19) いずれも2021年9月13日、石川のインタビューによる。
- 20) 「李慶泰の歩み」刊行委員会編『分断と対立を超えて：孤高の民族教育者・李慶泰の歩み』海風社、1999年。
- 21) 2020年10月12日、足立須香ほかのインタビューによる。なお済州島での本籍地は、朝鮮建国中学校『卒業記念：第九回卒業生1956』（全永女所蔵）によれば、「済州道北郡済州邑三陽里」であった。現在は済州市となっている。
- 22) 金賛汀『異邦人は君ヶ代丸に乗って：朝鮮人街猪飼野の形成史』岩波新書、1985年；杉原達『越境する民：近代大阪の朝鮮人史研究』新幹社、1998年；塚崎昌之「大阪—済州島航路の経営と済州島民族資本」『在日朝鮮人史研究』39号、2009年。
- 23) 水野直樹・文京洙『在日朝鮮人：歴史と現在』岩波新書、2015年、51ページ。
- 24) 杉原達『越境する民』（前掲）53ページ。
- 25) 杉原達『越境する民』（前掲）55ページ。
- 26) 杉原達『越境する民』（前掲）56～57ページ。また紡績労働者については、金賛汀『朝鮮人女工のうた：1930年・岸和田紡績争議』岩波新書、1982年。
- 27) 杉原達『越境する民』（前掲）60ページ。
- 28) 2020年10月12日のインタビュー（前掲）。
- 29) 塚崎昌之「一九二〇～一九四五年、大阪東成地域における朝鮮人の生活と鶴橋署」『在日朝鮮人史研究』42号、2012年。
- 30) 2020年10月12日のインタビュー（前掲）。
- 31) 手記草稿の一部と思われる全永女のメモに「母は日本語がままならないので、韓国系の工場で働いていた。仕事はかさの組み立てかな？はつきり分らないが、かさに関する仕事だった。私は仕事場には出入り出来なかった。炊事場の横の小さな部屋で何か工夫しておもちゃになるもので遊んでいたように思う。」とある（執筆日不明）。
- 32) 金富子「ジェンダー史としての植民地教育史」水井万里子ほか編『女性から描く世界史：17～20世紀への新しいアプローチ』勉誠出版、2016年。
- 33) 水野直樹・文京洙『在日朝鮮人』（前掲）35ページ、49ページ。多くのコリアンが住む大阪では、これより早く就学督励の動きが強まっており、1934年9月の大阪府内鮮融和事業調査会で「万全ヲ尽シテ就学セシメ普通教育ノ普及徹底ヲ図ル」方針が決定された。大阪府ではこの頃、コリアンの学齢児童1万4000人のうち6割を未就学と見積もっていたが、1938年には約4万人の対象児童のうち8割9分が就学するに至っていた。一方で、貧困のため働かざるを得ない子どもが、夜学校等の廃止によりかえって就学の機会を奪われるという問題が生じ、容易に解決できなかった。塚崎昌之「1930年代以降の在阪朝鮮人教育：内鮮「融和」教育から「皇民化」教育へ」『在日朝鮮人史研究』44号、2014年、23～31ページ。
- 34) 宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』未來社、1985年、第IV章。

- 35) 塚崎昌之「一九二〇～一九四五年、大阪東成地域における朝鮮人の生活と鶴橋署」(前掲) 71～72 ページ, 77 ページ。
- 36) 水野直樹『創氏改名：日本の朝鮮支配の中で』岩波新書, 2008 年。
- 37) 「御幸森小学校の学童疎開と学校」(小野賢一), ウェブサイト「大阪市内で戦争と平和を考える」(<https://jinken-kyoiku.org/heiwa/index.html>), 2021 年 10 月 20 日閲覧。
- 38) 小野賢一の聞き取りによれば, コリアン集住地域の学校であっても, 集団疎開にコリアンが加わっていた例は少ないという。集団疎開にも一定の費用を要したことや, 食習慣の違いなどが影響している可能性はあるが, 理由は未詳である(2021 年 10 月 22 日, 石川による電話インタビュー。また塚崎昌之からも同趣旨の教示を得た)。
- 39) 本項について次の文献を参照した。横山篤夫「大阪空襲朝鮮人犠牲者追悼集会」『人権と部落問題』73 巻 2 号, 2021 年; 劉戴鳳・川瀬俊治「インタビュー 大阪大空襲で七歳の妹は爆死, 姉は背中に大火傷を負った」『部落解放』791 号, 2020 年; 文箭祥人「朝鮮人空襲犠牲者を私たちは追悼しているのか」『部落解放』807 号, 2021 年。また脱稿後, 塚崎昌之「大阪空襲と朝鮮人——戦中, そして戦後」『在日朝鮮人史研究』51 集, 2021 年が発表された。
- 40) 大阪のコリアンは 1945 年に入って疎開や帰国でかなり減少したが, それでも 1945 年 6 月の大阪府知事『安井知事引継書』(大阪府公文書館)によれば, 232,850 人がなお在留していたという(塚崎昌之の筆者あて私信, 2021 年 10 月 31 日)。
- 41) 2020 年 7 月 15 日のインタビュー (前掲)。
- 42) 『尋常小学校卒業生ノ動向ニ関スル調査』(文部省教育調査部, 1938 年)。尋常小学校 162 校(東京市 11 校, それ以外 151 校)を対象とするサンプル調査。菊池城司「近代日本における中等教育機会」(『教育社会学研究』第 22 集, 1967 年); 同「誰が中等学校に進学したか」(『大阪大学教育学年報』第 2 号, 1997 年)。
- 43) 金玉順・全永女「四月二四日 その時その後の二人」『抗路』5 号, 2018 年。
- 44) 金玉順・全永女「四月二四日 その時その後の二人」(前掲)。
- 45) 2020 年 7 月 15 日のインタビュー (前掲)。
- 46) 金英達『在日朝鮮人の歴史(金英達著作集Ⅲ)』明石書店, 2003 年, 45 ページ。
- 47) 杉原達『越境する民』(前掲) 118 ページ。なお杉原は(第二)君が代丸が 1945 年 4 月の空襲により沈没したとするが, 塚崎昌之は, 同年 6 月 1 日の第二次大阪大空襲によって炎上・沈没したとする(塚崎の筆者あて私信, 2021 年 10 月 31 日)。参考資料として『知られざる戦没船の記録』(柘植書房, 1995 年), 下巻「喪失船舶明細表」147 ページ。
- 48) 梁永厚『戦後・大阪の朝鮮人運動: 1945 - 1965』未来社, 1994 年, 38 ページ。
- 49) 金英達『在日朝鮮人の歴史』(前掲) 47 ページ; 朴沙羅『外国人をつくりだす』ナカニシヤ出版, 2017 年, 94～105 ページ。
- 50) 外村大『在日朝鮮人社会の歴史学的研究』緑蔭書房, 2004 年, 370 ページ。
- 51) 2020 年 7 月 15 日のインタビュー (前掲)。
- 52) 2021 年 11 月 3 日, 全永女の姪の金薫子が本人に確認した。
- 53) 『分断と対立を超えて』(前掲) 126 ページ。
- 54) 白頭学院編『白頭学院創立 40 周年記念誌』1987 年, 257 ページ。
- 55) 白頭学院編『建国: 白頭学院創立 60 周年記念誌』2006 年, 241 ページ。
- 56) 全永女自身の回想によれば, 唯一の女子生徒だったので話し相手もなく, 休み時間は居場所に困ったという。2020 年 10 月 12 日のインタビュー (前掲)。
- 57) 白頭学院建国学校の草創期の記録としては, 筆者が確認した限り『白友』創刊号(白頭学院校友会, 1974 年)に掲載された「白頭学院의 나아갈 길」(李慶泰・朴炳閔)が最も古い。1976 年に同校が韓国系学校に転換する以前の記録という意味でも貴重である。1987 年以後は 10 年ごとに記念誌が編まれ(40～70 周年), それぞれに歴史的な叙述があるが, 特に『40 周年記念誌』(前掲)で元教員李承德が初期の沿革を整理している。また『60 周年記念誌』(前掲)では全永女が李承德の記述を補訂し,

坂井原孝夫・呉景萬がその後の沿革を記しているほか、2005年に発見された1946～57年撮影の16ミリフィルムの一部を編集のうえDVD附録として添付している。李慶泰個人の伝記としては『分断と対立を超えて』(前掲)がある。以下、白頭学院与李慶泰についての叙述は別に断らない限りこれらに依拠している。これらの閲覧には白頭学院と林芳子の協力を得た。

- 58) 曹圭訓について『40周年記念誌』(前掲)165～166ページ、『60周年記念誌』(前掲)72～77ページ。『40周年記念誌』によると曹圭訓は1949年6月に韓国民団中央本部団長に就任する際に白頭学院理事長を辞したとするが、『60周年記念誌』の歴代理事名簿には設立代表委員(1946年3月～51年3月)、第1期理事長(51年3月～52年6月)、第4期理事長(57年7月～60年11月)として現れる(344ページ)。また『60周年記念誌』によれば曹圭訓は1950年夏まで私財を投じて白頭学院の運営資金を提供したが、経営事業の悪化に伴い中断したという。全永女「李慶泰先生に捧げる感謝のことば」(第6節(2))にもこれに符合する記述がある。なお曹圭訓は没後、2011年10月に韓国政府から国民勲章無窮花章を受章した。「국민훈장 무궁화장 받은故 조규훈 선생」(연합뉴스オンライン版, 2011年10月5日最終修正, 2021年10月14日確認)。
- 59) 1949年5月31日に文部省から財団法人白頭学院の設立が認可されたという(『分断と対立を超えて』(前掲)314ページ)。それ以前から任意団体として白頭学院の名称が用いられていた可能性はあるが明らかでない。また校名について、1948年の財団法人認可時には「朝鮮建国中学校」「朝鮮建国高等学校」であったものが、1951年の学校法人認可時に「朝鮮」が外されたという(元白頭学院事務長・金恒勝より筆者への私信, 2021年11月3日)。その後も、しばらくは慣習として「朝鮮」を冠する校名が用いられていた可能性がある。全永女が持つ卒業アルバムを見ると、中学9回(1956年3月)、中学10回(57年3月)、高校7回(57年3月)の内表紙には「朝鮮建国中学校」「朝鮮建国高等学校」とあり、高校8回(58年3月)には「建国高等学校」とある。
- 60) 「白頭学院의 나아갈 길」(前掲)。
- 61) 『分断と対立を超えて』(前掲)314～315ページ。
- 62) 「白頭学院의 나아갈 길」(前掲)。この対談記事は朝鮮文で記載されているのを、石川が仮訳した。以下の引用文も同様。
- 63) 『分断と対立を超えて』(前掲)134～138ページ、『60周年記念誌』(前掲)184ページ。
- 64) 『分断と対立を超えて』(前掲)132～133ページ。
- 65) 例えば朝鮮戦争中の1952～53年には、祖国防衛隊を名乗る者たちが教職員組合を通じて白頭学院を共和国側に取り込もうとした(『40周年記念誌』(前掲)87～91ページ)。一方で1950年代には韓国政府から資金援助の申し出があったが、学校運営への介入を危惧した李慶泰は辞退した(『分断と対立を超えて』(前掲)243～247ページ)。
- 66) 『40周年記念誌』(前掲)118ページ。
- 67) 『分断と対立を超えて』(前掲)240～248ページ。
- 68) 全永女「李慶泰初代校長を思う」『60周年記念誌』(前掲)184～187ページ。
- 69) 金英達『在日朝鮮人の歴史』(前掲)46～47ページ。
- 70) 文京洙・水野直樹『在日朝鮮人』(前掲)111ページ。
- 71) 「白頭学院의 나아갈 길」(前掲)30～32ページ、『分断と対立を超えて』(前掲)152～161ページ。
- 72) 金玉順・全永女「四月二四日, その時その後の二人」(前掲)。
- 73) 「白頭学院의 나아갈 길」(前掲)31ページ。ただし金剛学園が財団法人に認められたのは白頭学院から10か月後の1950年3月であり(金剛学園HP, 「金剛学園の歩み」, 2021年10月23日閲覧), その際には李慶泰が支援したという(『40周年記念誌』(前掲)87ページ)。学校認可をめぐる経緯については今後、さらに検討が必要だと思われる。
- 74) 小沢有作『在日朝鮮人教育論(歴史篇)』亜紀書房, 1973年, 250ページ。白頭学院が1949年4月に建国小学校を開設したのは、閉校を余儀なくされた朝鮮人学校の児童を受け入れるためであったという。『40周年記念誌』(前掲)85ページ。
- 75) 現在存続する民族学校には、在日本朝鮮人総連合会(朝鮮総連)と強い結びつきを持つもの、韓国民

団と強い結びつきを持つもの、いずれとも等距離を保つものの三種がある。また法令上の種別としては、学校教育法上の学校（一条校）と各種学校に属するものとに分かれる。

- 76) 小沢有作『在日朝鮮人教育論』（前掲）249～250 ページ。
- 77) 「(表 13) 4 年制大学への進学率と 18 歳人口の推移」（武庫川女子大学教育研究所ホームページ，女子大学統計・大学基礎統計，2021 年 3 月更新，同年 10 月 14 日確認）。
- 78) 五十周年記念事業委員会編纂『大阪女子大学五十年史』1976 年。
- 79) 2020 年 7 月 15 日のインタビュー（前掲）。
- 80) 2021 年 10 月 31 日，電話による筆者のインタビュー。
- 81) 金美優「わが恩師へのオマージュ」（未公刊，2021 年 1 月 3 日成稿）。
- 82) 白頭学院『白頭学院創立 50 周年記念誌』1997 年，71 ページ。
- 83) 本段の内容は金美優（注 2）・金薫子（注 52）ほか，近親者・教え子の皆さんのお話を石川がまとめたものである。
- 84) 2021 年 5 月 24 日，石川によるインタビュー。
- 85) 2020 年 11 月 10 日，2021 年 9 月 13 日，石川によるインタビュー。
- 86) 金玉順・全永女「四月二四日 その時その後の二人」（前掲）76 ページ。全永女のノートによれば，全永女はこれとほぼ同文をインタビューアの朴才瑛に送り，原稿への挿入を依頼していることから（2018 年 6 月 20 日），全永女自身の考えとみて差し支えない。
- 87) 『朝鮮総督府及所属官署職員録（昭和十七年七月一日現在）』（朝鮮総督府編，1943 年）によれば，光山郡松汀邑には松汀職業学校と松汀工業実修学校があったことが確認できる（315 ページ）。
- 88) 「強制する強制である」は原文の通り。

<参考文献>

- 李慶泰・朴炳閔「白頭学院의 나아갈 길」『白友』創刊号，1974 年。
「李慶泰の歩み」刊行委員会編『分断と対立を超えて：孤高の民族教育者・李慶泰の歩み』海風社，1999 年。
[大阪女子大学] 五十周年記念事業委員会編纂『大阪女子大学五十年史』1976 年。
小沢有作『在日朝鮮人教育論（歴史篇）』亜紀書房，1973 年。
菊池城司「近代日本における中等教育機会」『教育社会学研究』第 22 集，1967 年。
同 「誰が中等学校に進学したか」『大阪大学教育学年報』第 2 号，1997 年。
金英達『在日朝鮮人の歴史（金英達著作集Ⅲ）』明石書店，2003 年。
金玉順・全永女（朴才瑛編）「四月二四日 その時その後の二人」『抗路』5 号，2018 年。
金贊汀『朝鮮人女工のうた：1930 年・岸和田紡績争議』岩波新書，1982 年。
同 『異邦人は君ヶ代丸に乗って：朝鮮人街猪飼野の形成史』岩波新書，1985 年。
金富子「ジェンダー史としての植民地教育史」水井万里子ほか編『女性から描く世界史：17～20 世紀への新しいアプローチ』勉誠出版，2016 年。
金美優「わが恩師へのオマージュ」（未公刊），2021 年 1 月 3 日成稿。
杉原達『越境する民：近代大阪の朝鮮人史研究』新幹社，1998 年。
朝鮮総督府編『朝鮮総督府及所属官署職員録（昭和十七年七月一日現在）』1943 年。
塚崎昌之「大阪—济州島航路の経営と济州島民族資本」『在日朝鮮人史研究』39 号，2009 年。
同 「1920 - 1945 年，大阪東成地域における朝鮮人の生活と鶴橋署」『在日朝鮮人史研究』42 号，2012 年。
同 「1930 年代以降の在阪朝鮮人教育：内鮮「融和」教育から「皇民化」教育へ」『在日朝鮮人史研究』44 号，2014 年。
同 「大阪空襲と朝鮮人——戦中，そして戦後」『在日朝鮮人史研究』51 集，2021 年。

- 外村大『在日朝鮮人社会の歴史学的研究』緑蔭書房, 2004年。
- 朴沙羅『外国人をつくりだす』ナカニシヤ出版, 2017年。
- 白頭学院編『白頭学院創立40周年記念誌』1987年。
- 同 『白頭学院創立50周年記念誌』1997年。
- 同 『建国: 白頭学院創立60周年記念誌』2006年。
- 文箭祥人「朝鮮人空襲犠牲者を私たちは追悼しているのか」『部落解放』807号, 2021年。
- 水野直樹『創氏改名: 日本の朝鮮支配の中で』岩波新書, 2008年。
- 水野直樹・文京洙『在日朝鮮人: 歴史と現在』岩波新書, 2015年。
- 文部省教育調査部『尋常小学校卒業生ノ動向ニ関スル調査』1938年。
- 宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』未來社, 1985年。
- 梁永厚『戦後・大阪の朝鮮人運動: 1945 - 1965』未來社, 1994年。
- 横山篤夫「大阪空襲朝鮮人犠牲者追悼集会」『人権と部落問題』73巻2号, 2021年。
- 劉戴鳳・川瀬俊治「インタビュー 大阪空襲で七歳の妹は爆死, 姉は背中に大火傷を負った」『部落解放』791号, 2020年。
- 大阪金剛インターナショナル小中高等学校, 「金剛学園の歩み」, <https://www.kongogakuen.ed.jp/about/story/>, 2021年10月23日アクセス。
- 大阪市内で戦争と平和を考える有志, 「大阪市内で戦争と平和を考える」, (<https://jinken-kyoiku.org/heiwa/index.html>), 2021年10月20日アクセス。
- 大阪市立御幸森小学校, 「学校概要」, <http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=e671481>, 2021年9月18日アクセス。
- 高槻赤十字病院, 「概要・沿革」, <https://www.takatsuki.jrc.or.jp/about/history.html>, 2021年10月19日アクセス。
- 武庫川女子大学教育研究所, 「女子大学統計・大学基礎統計」, <http://kyoken.mukogawa-u.ac.jp/statistics/>
- 文部科学省, 「学制百年史」, https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317766.htm, 2021年10月19日アクセス。
- 「국민훈장 무궁화장 받은故 조규훈 선생」, 연합뉴스オンライン版, <https://www.yna.co.kr/view/AKR20111005185200056>, 2011年10月5日最終修正, 2021年10月14日アクセス。

